

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

翻訳についての断章

山岡洋一

- 香辛料を少々、電子辞書で探して

香辛料には和風の言葉を少々、電子辞書で探して……。こんなはったりが通用するようでは、翻訳の世界はまだまだ幼稚だ。学生の同人誌ではないのだから、もう少し大人にならなければいけない。

私的ミステリ通信（第10回）

仁木めぐみ

- 事実は小説より……

「被害者探し」「探偵探し」など奇抜な趣向で有名なパット・マガーを未訳作品も含めて紹介する。

名訳

須藤朱美

- 小尾芙佐訳『アルジャーノンに花束を』

原書の持つリアルさを損なうことなく、日本の読者の感覚に合わせた文体で訳された名訳書だ。

ひとさまの誤訳（第4回）

柴田耕太郎

- 『英文解釈教室』（研究社出版、伊藤和夫著）

大学受験生対象にロングセラーをつづけるこの本は、最高の英語文法学習書だ。ただ、伊藤和夫のよい翻訳への思いをこの本に反映させるには、訳文を修正する必要がある。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

香辛料を少々、電子辞書で探して

自分が無知であることも知らなかったころ、下町にはめずらしく洒落た喫茶店に入って、カレーを食べていた。ふと見ると、カレーに奇妙なものが入っている。どうみても木の葉だ。早速、文句を言った。店の人はできた人だから、「ローリエですよ、香辛料の。月桂樹の葉という方が分かりやすいかな」と、丁寧に教えてくれた。「盛りつけるときに注意しているのに、入ってしまったんですね」ともいってくれた。お陰でひとつ賢くなった。料理に木の葉とか枝とかが入っていても、文句をいってはいけない。だが、料理についてはいまだに何も知らないの、間違っただけの香辛料が入っていても、その辺の木から風に飛ばされてきた葉が入っていても、見分けがつかない。

最近、評判のいい翻訳家が訳した評判のいい作品をつぎつぎに読んでいます。そのひとつを読みはじめて、3行目で止まってしまった。こう書かれていたからだ。

この話には、鈍色〔にびいろ〕の雲と激しい雨が似つかわしい。(芹澤恵訳トマス・クック著『夏草の記憶』文春文庫、11ページ)

It goes with gray clouds and heavy rain, (Thomas Cook, Breakheart Hill, Bantam Books, p. 3)

調べた範囲では、「鈍色」は源氏物語で喪服の色を表現する言葉として何度も使われているし、「鈍色の雲」という表現も有島武郎の『カインの末裔』などで使われている。死と雲を連想させる言葉だから、文脈にあっていないわけではない。だが、旧字旧仮名で文語調の文章ならともかく、この訳の文体にはどう考えても似つかわしくない。原文を読んでも、「鈍色」といわなければならないようには感じられない。

では訳者はなぜ、こんな言葉を使ったのだろうか。答えはたぶんはっきりしている。同じ著者の『緋色の記憶』が前の年に評判になり、そこでこのような言葉が頻繁に使われていたのだ。たとえば、このように。

.....しかし、そのときの彼女がどれほど美しかったか、深緋〔こきひ〕色の襟に真っ白な頸〔くび〕がどんなに映えていたか、それだけはよく憶えている。.....(鴻巣友季子訳トマス・クック著『緋色の記憶』文春文庫、19ページ)

... I do know how beautiful she was, however, how immaculately white her throat looked against the wine-red collar of her dress. (Thomas Cook, The Chatham School Affairs, Bantam Books, p. 8)

『緋色の記憶』はその年のベスト・ミステリーに選ばれるなど、かなりの評判になった。鴻巣友季子にとっても、いうならば出世作になった。そして、wine-redのように誰でも知っている言葉を「深緋色」のようにほとんど誰も知らない言葉で訳すのが、鴻巣友季子のスタイルだった。

前年に『緋色の記憶』が成功したように思えたのだから、芹澤恵が『夏草の記憶』を訳すにあたって、無意識にそれを真似ようとしたとしても不思議ではない。冒頭の3行目で gray clouds という言葉にぶつかったとき、思わず電子辞書で「灰色」の類語を探し、「鈍色の雲」という訳語を選んでしまったのだろう。はっきりいってしまえば、芹澤恵は鴻巣友季子とは比較にもならない。翻訳者としての総合力がまるで違う。少なくとも『夏草の記憶』と『緋色の記憶』を比較したかぎりでは、そういえるはずだ。だから、不思議だと思える。年下だし、力があるかに劣る人の文章を真似ることはないはずなのだ。だが、出版の世界では売れば官軍である。売れた本を真似ようとする気持ちがあればたらくのは、ある意味で仕方がないことなのかもしれない。

だが、問題はそこにはない。年下だろうが、力が劣っていようと、良いことなら真似ればいい。問題は『緋色の記憶』のスタイルが良いか悪いかである。

答えは少し考えてみればすぐにわかる。「深緋色」という言葉を知っているだろうか。知らなくても恥にならない。広辞苑にすらでていない言葉なのだから。インターネットで調べると、和服の色などにまれに使われていることがわかる。それでも、ほとんどの読者が知らない言葉であるのはたしかだ。ほとんどの読者が知らない言葉を使うのは良いことなのか悪いことなのか。それは場合による。必要があり、しかも良い言葉であれば使うべきだ。必要がなかったり、文脈に合わなかったりする場合には、使うべきでない。

そこで、「深緋色」について考えてみよう。まず文脈上、適切な言葉だろうか。おそらく、2つの点で適切だとはいえない。第1に、これは老人が15歳の少年のころを回想している場面だ。「深緋色」という言葉は15歳の少年に相応しいだろうか。どう考えても相応しくない。老人ならこの言葉を知っている可能性があるが、こんな文脈でこんな使い方をしようと考えるはずがない。万一使うとしても、「あの時に目に焼きついた色が『深緋色』と呼ばれていることを後に知った」というような書き方をするはずだ。第2に原文の wine-red は「深緋色」とはかなり違う。色の表現はむずかしく、色見本をみても分からない場合が多いのだが、それでも、wine-red と「深緋色」では違いすぎる。

つまり、原著者の意図を適切に表現するという観点からは、「深緋色」という訳語がでてくるはずはない。ではなぜ、訳者はこの言葉を使ったのか。

答えはひとつしかない。こんな言葉を知っていると、自慢したかったのだ。要するに、はったりなのである。裏が透けてみえるから、虚仮威し〔こけおどし〕にすぎないといえる。読者は虚仮にされている。虚仮の一念で化けの皮をはがしてやろうとする人もいるだろうが、なかにははったりに負けてありがたがる人もいる。これを名訳だなんぞと持ち上げる人まででてくる。

繰り返すが、ほとんどの読者が知らない言葉を使うのが良くないと主張しているのではない。文脈にそぐわない言葉をわざわざ使うことに問題があるといっているだけだ。そういう例を2つだけ指摘しよう。

旧風の色濃いニューイングランドの村に降りたった若い女性の姿を、そのまま永遠に封じこめたいと願うのでは、もちろんない。老いの境地まで生きた

深緋色と wine-red

(印刷でうまく色がでない場合は画面でご覧ください)

深緋色

wine-red

ものであれば、かならず人生からある明快な真実を学ぶ。せめてそれをあの人に忠告するまで、時が歩みを止めてくれたらと思うのである。すなわち、“人の情は幾久しくつづかず、ならばその思い、長らえさせることこそ、人のつとめなり”という真実を。……(20ページ)

It's not that I want to freeze her there for all eternity, of course, a young woman arriving in a quaint New England town, but that I merely wish to break the pace long enough to point out the simple truth life unquestionably teaches anyone who lives into old age: since our passions do not last forever, our true task is to survive them. (p. 9)

「人の情は幾久しくつづかず、ならばその思い、長らえさせることこそ、人のつとめなり」というのがどういう意味なのか分かるだろうか。正直に言って、さっぱり分からない。「幾久しく」とか、「長らえさせる」とか奇妙な言葉が使われているなあ……と思うばかりで、意味が伝わってこない。「幾久しく」は結納式や結婚式に「未長く幾久しく」などの形で使われる言葉だ。それ以外にどういう場面でどう使われるかを調べてみた(インターネットで検索すると、用例がいくつかでてくる)。やはり、めでたい場面や願いごとをする場面で使う言葉のようだ。だから、「つづかず」がつづくはずがない。ちなみに、『新明解』には、「幾久しく栄え有れ」の意の圧縮表現」と書かれている。

訳文を読んでも意味が分からない。仕方なく原文を読むと、なんということもない教訓が書かれている。なぜこのような奇妙な訳文ができあがったのかは分からない。おそらく、はったりをかますのに忙しくて、原文を読みこむ暇がなかったのだろう。あるいは、survive them が survive the passions であることに気づかなかったか、気づいたのだが survive の意味を知らなかったのだろう。もうひとつ、passion の意味が分からなかったのだろう。「情」というのはふつう、落ちついた感情だが、passion は激しい感情だ(だから、長くはつづかず、passion が冷めた後が重要なのだという話になる)。

もうひとつの例は、「訳者あとがき」の冒頭である。原文はないので、文章の全責任が訳者にある。

本書は、トマス・H・クックが一九九七年度のアメリカ探偵作家クラブ賞、最優秀長編賞を捲土重来〔けんどちょうらい〕ついに掌中にした The Chatham School Affair (一九九七年)の全訳である。

(395 ページ)

たぶん、「捲土重来」は「けんどじゅうらい」ではなく「けんどちょうらい」と読むのだと書いてあるのを読んで、使ってみたかったのだろう。そうとしか考えられないほど、不釣り合いな言葉だ。そして「掌中にした」と書くのは、「掌中」の意味を知らないからだろうとしか思えない。まさにはったりだが、これで驚くのはよほど愚かな人だけだろう。

たいていの読者は愚かではない。とくに読書家と呼ばれる人たち、本をいちばん買ってくれる人たちは愚かではない。その事実を知らないから、このような不用意な表現を使うのだ。

それまで知らなかった言葉にぶつかると、意味も文脈もろくに知らないまま、使ってみたくなる。そういう時期が人生に2回あるように思う。最初は言葉を覚えはじめた時期だ。大人がしゃべっている言葉を聞きかじって使ってみる。たとえば、親戚の結婚式に出席し、「どうか幾久しく」とか「末長くお幸せに」とかの言葉を聞いて、さっそく使ってみたくなる。この年齢の女の子や男の子はほんとうにかわいい。2回目は20歳前後の生意気盛りのころだ。自分が知らなかった言葉ではなく、友人や親が知らないはずの言葉を使ってみたくなる。そうやって必死に背伸びして書いた文章は、「若書き」という。数年もすると、生意気盛りのころに書いた文章を読んで、赤面するようになるのがふつうだ。

大根役者が大見得を切ったような若書きの文章は、ふつうなら見向きもされない。ふつうなら見向きもされないことが、翻訳の世界ではもてはやされている。もてはやされるから、若書き風の文体を使ってみたくなる人が増える。たとえば先月号で紹介した「あやめもわかぬ頻闇」がそうだ。たとえば、以下の訳文もそうだ。

ここは空気が異なり、心なしか澄んでいる。光が冴え、木の葉の縁や建物の輪郭が、記憶に劣らず際立っている。この場所が屋敷と呼ばれていたころと変わらぬ光の中で、思い出が五感にしみわたる。午後遅くの雨で甘美にすすがれた、爽涼たる時刻。
(越前敏弥訳ロバート・ゴダード著『惜別の賦』創元推理文庫、12ページ)

The air is different here, purer somehow. The light is clearer, the edges of the leaves and the lines of the buildings as sharp as the memories. Recollection

invades my senses through the unchanged brightness of this place called home. I raised the window on the evening, cool and sweetly washed by late afternoon rain. (Robert Goddard, Beyond Recall, Corgi Books, p. 11)

訳者にとってはじめての作品の冒頭だから、力が入っている。これを読んだとき、若書きだという印象を受けた。文脈に相応しくない言葉を使っているわけではなく、下手ではないが、気負いのみえる文章だ。訳者はたぶん20代なのだろうと思った。ところがである。「訳者紹介」によれば、もう少しで40歳になるときの翻訳なのだ。鴻巣友季子もほぼ同じ世代の翻訳家であり、『緋色の記憶』は30代半ばのものである。20歳すぎなら笑って許せるのだが。

少し前まで、はったりに使われるのはたいていバタ臭くて生硬な言葉だった。いまでは和風がはやっている。香辛料には、源氏物語や落窪物語などで使われた和風の言葉を少々、電子辞書で探して……。こんなはったりが通用するようでは、翻訳の世界はまだまだ幼稚だ。学生の同人誌ではないのだから、読者にお代をいただくというのだから、もう少し大人にならなければいけない。

長谷川 宏 いまこそ読みたい 哲学の名著

自分を変える思索のたのしみ

アウグスティヌス シェイクスピア プラトン
アラン ルソー 孔子 マックス・ヴェーバー
パスカル J・S・ミル フォイエルバッハ
ボードレール デカルト ドストエフスキー
ウイトゲンシュタイン メルロ・ポンティ

晴耕雨読にふさわしい古典たちから
「哲学」のおもしろさが見えてくる。

●1,785円(税込み) 4-334-97459-7

光文社 〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6
<http://www.kobunsha.com>

事実は小説より……

ご無沙汰しておりました。「私的ミステリ通信」です。三ヶ月ほどお休みさせていただきましたが、再開させていただきます。

ミステリ・ファンは驚かされるのが大好きです。奇抜な発想、大胆な構成、新しい趣向はいつも歓迎されます。エドガー・アラン・ポーに始まるミステリの歴史は、そうした驚きの連続だったといっても過言ではないでしょう。その歴史の中で、1946年に新しい趣向をひっさげてデビューした作家がいました。アメリカの女流作家、パット・マガーです。

それ以前のミステリ界にももちろんいろいろな趣向はありました。例をあげると大御所エラリー・クイーンは趣向をこらすのが大好きで、たとえば『ローマ帽子の謎』（井上勇訳 創元推理文庫ほか）を始めとするいわゆる「国名シリーズ」には、必ず「読者への挑戦状」というのが登場します。これは探偵エラリー・クイーン（作者と同名の登場人物です）が、推理を披露する前に、作者エラリー・クイーンから「ここまで手がかりは出そろったので、どうぞ犯人を当ててください」という読者あてた挑戦状なのです。

こういう茶目っ気を愛するミステリ界に現われたマガーが新鮮だったのは、今まで誰もがミステリと言えば「犯人探し」のストーリーだと思っていた中で、犯人は最初からわかっている「被害者探し」のミステリを書いたからなのです。

そのものズバリの題名『被害者を捜せ』（中野圭二訳 創元推理文庫 原題は Pick Your Victim）は発表と同時に大評判になりました。内容を簡単にご紹介しましょう。事件の舞台はワシントンですが、語り手ピートはアリューシャン列島にいます。時代は第二次大戦中で、ピートは海兵隊員としてアリューシャン列島に送られてきました。隊員たちは暇をもてあまし、活字に飢えています。そこに隊員の一人に実家から小包が送られてきます。彼らは中身の缶詰より詰め物に使われていた新聞紙の切れ端に夢中になりました。切れ切れの記事をまわし読みしていると、その中にピートが出征まで四年間勤めていた家事改善協会〈家善協〉で殺人事件が起こったという記事があったから大変

です。記事は途中が破れていて、犯人は会長で、被害者は役員だとしかわかりません。くわしい状況はわかりませんし、〈家善協〉には役員が十人もいるので話はややこしいのです。ピートからそれを聞いた隊員たちは、暇つぶしに被害者あての賭けをしようということになります。ピートが同僚のシーラに事情を尋ねる手紙を書き、返事が届くまでの間に、ピートが知っている限りの状況をみなに話して、それぞれが推理をするというのです。

こうしてピートが語ることになった〈家善協〉の内情というのはかなり込み入っています。女性たちに家事の能率化や改善を提案するというこの協会の設立者である会長ポールは、やり手の起業家で、快活な人物ですが、かなりの女好きです。ピートはポールが殺人を犯すとは信じられません。そして問題の役員たちですが、ゴシップ好きでひがみ屋のホイップル、ポールの秘書であり長年の愛人であるアン、ポールの幼馴染で、少年時代にポールの過失で片目の視力を失ったレイ、有名な家事評論家であるバーサなどなど、それぞれにひと癖もふた癖もある人物ばかりです。ポールの女性問題をめぐるトラブル、役員同志の競争心、そして会を乗っ取る計画など、ピートが勤務していた四年の間に、人間関係はこれ以上ないというほどもつれていたので……。

世間から隔絶され、暇を持て余しているむくつき男たちが、「家事改善協会」の細かなゴタゴタにおとなしく耳を傾けている様はなかなか微笑ましいものがあります。〈家善協〉の紛糾具合と対照的であり、また全体の雰囲気をも明るくする役割も果たしています。新聞紙が破れていて被害者の名前がわからないというのは、「被害者探し」に必然性を出すのに十分で、しかもユーモラスな、なかなか心憎い設定です。

マガーは『被害者を捜せ!』から5年間、年に1冊ずつ新しい趣向のミステリを発表し続けました。犯人&被害者探し、探偵探し、目撃者探し、そしてもう一度被害者探し……。その後もサスペンスや本格やスパイものなどのミステリを発表し続けますが、こうした犯人探し以外の趣向の作品を発表したのはこの初期の5年間だけでした。現在この5作はすべて邦訳が出ているのはうれしいかぎりです。

初期の作品からもう1冊紹介しましょう。被害者&犯人探しの『七人のおば』（大村美根子訳 創元推理文庫）です。2作目であるこの作品でマガーはさらにその持ち味を發揮しています。

結婚してイギリスにやって来たばかりのサリーは夫ピーターと幸せに暮らしています。しかしある日、アメリカの友人からきた手紙を読んで、サリーは驚きます。その手紙には「あなたのおばさんが夫を殺して逮捕された」という意味のことが書かれていたからです。その友人の文章がとりとめないせいで、どのおばが殺人の犯したのかがわかりません。何せサリーにはおばが七人もいて（考えただけでもくらくらすような設定ですよ）、しかも全員結婚しているのですから！妊娠中であるサリーは自分にも生まれてくる子供にも殺人者の地が流れているのだろうかと思ひます。夜も眠れずに悩むサリーからピーターは、サリーがイギリスに来るまでの一家の事情を聞きます。

サリーは幼い頃に事故で両親を亡くし、母親の姉クララの家で育てられました。母親は八人姉妹の次女で、資産家フランクと結婚している長女クララが、姉妹とその夫たちを取り仕切っています。お堅いオールドミスの女教師テッシー、二人の子供を抱えて離婚し、後に再婚するアグネス、アルコール中毒のイーディス、潔癖で繊細で男嫌いのモリー、美人で遊び好きなドリス、フランクに甘やかされ、ぜいたく三昧に育ったジュディ。七人姉妹といえ、それだけでかましいものを、この姉妹はそれぞれに個性的なので、さらに事態は大変です。しかし体裁や世間体をおそろしく気にする長女クララは、この個性的な妹たちをみな常識的な結婚の枠におさめようとするため、一家ではいつも恐ろしい争いが繰り広げられています。テッシーの婚約者パートを、奔放なドリスが奪いそうになりますが、クララは恐るべき強引さでパートを説き伏せ、そのまま結婚させます。のちにドリスがパートと駆け落ちしようとした時も、ドリスの求婚者マイクルと手を組んで、阻止します。嫁姑関係が原因でアルコール中毒になったイーディスが逃げ出した時は、頑として夫のもとに送り返しましたし、男性を近づけなかったモリーが少しでも気を許した男性がいたと見るや、一気にその男性、トムと結婚させてしまいます……。サリーが引き取られてから大人になるまでの間、おばたちはそれぞれに無理を抱え、人間関係はいつも一触即発だったのです。

犯人と被害者の名前は翌日、ピーターがアメリカの新聞を調べに行つてわかります。答えはあまり意外ではありませんが、サリーを通して語られるおばたちの描写は、同じ女性として読んでいても、迫力があり、鬼気迫るものさえあります。そしてこの作品でもまた、

『被害者を捜せ！』と同じように、語り手サリーとピーターの幸せさと明るさが全体を救っています。

未訳の作品を二冊紹介しましょう。どちらも「～探し」という趣向のものではありませんが、よりマガーらしさを發揮させた読み応えのある本格ミステリです。

まず Death in a Million Living Room です。エンタープライズという雑誌の調査係メリッサは、TV番組の実情の取材を命じられ、人気コメディアン、ポッジ・オニールの番組にリハーサルから密着することになります。人気番組を取材できて、人からはうらやまれますが、実はメリッサが取材対象をこの番組を選んだのには個人的な理由がありました。番組の司会、デイク・ジャクソンとはジャーナリズム学校時代に同級生でした。メリッサは学校時代、一度だけデイクにデートに誘われましたが、会話が盛り上がりず、しかもデイクは見え透いた言い訳をして早々に帰ってしまったという過去がありました。そのことに傷ついていたメリッサは「エンタープライズ」誌という看板を背負ってデイクの前に登場し、今度は自分からふつてしまおうと目論んでいたのです。

1951年ですから、番組はもちろん生放送です。前日のリハーサルに行き、学生時代より気さくになったデイクと再会したメリッサは自分の子供っぽいたくらみが恥ずかしくなります。しかも取材であることを周囲に伏せておいたために、デイクのガールフレンドと間違われ、動揺します。そして番組を創り上げていく現場は想像もつかないほど厳しいものでした。ポッジとコンビを組む女性コメディアン、スコッティは、すべての台本を書き、事実上ポッジの一拳手一投足を支配しています。ポッジの元妻でもある彼女は、ポッジだけでなく、現場にいる全員を我が物顔に仕切り、辛らつな言葉を投げかけ、ポッジと仕事をしたいと近寄ってくる人間をみな近づけません。

そんな中、リハーサル中の事故でスコッティが怪我をします。意識を失っている彼女が運び出されるやいなや、スコッティは明日出演できないだろうからと、スコッティが抜けた穴に自分の企画をいれようと、人々はやっきになります。主役のポッジの意見も聞かず、その夜のうちに翌日の生放送の台本がすべて書き換えられました。その議論が行われている間、メリッサは所在なげにしていたポッジから、自分とはとても面白いコメディアンだと言われているが、すべてはスコッティに言われるままにやっているだけで、実は自分の何が面白いのかわからないと告白されます。

翌日、新しい台本のリハーサルをしているとそこにスコッティが現われます。杖をついている彼女は、こ

の状態でも演技できるように、台本を書き換えてきていて、自分はちゃんと出演すると宣言します。落胆する人々を尻目に、結局ポッジとスコッティのコンビで番組は始まり、ジュースの生コマーシャルの最中に、打ち合わせどおりスコッティが飲もうとしたジュースを、突然ポッジが取り上げて飲み、カメラの前で倒れ、息絶えます。ジュースには毒薬が混入されていました。犯人が狙ったのはスコッティなのか、それとも……。

生放送中の殺人というのは当時とてもセンセーショナルな設定だったことでしょう。物語の後半まで殺人は起こらないのですが、そこまでの緊張感の盛り上げ方がうまく、飽きずに読まされてしまいます。ポッジを取り巻く人々はみな個性的な野心家ばかりですし、特に支配的なスコッティの行動には読んでいて恐ろしさや苛立ちを感じますが、語り手メリッサの健全さが読者に安心感を与え、デブとのロマンスの初々しさが全体を明るく中和しています。

もう1冊、Murder Is Absurdをご紹介します。こちらは演劇界を舞台にしたミステリです。

ブロードウェイの舞台女優サバンナ・ドレイクは、脚本家レックス・ピアソンと結婚します。美女と才人という人もうらやむ組み合わせでしたが、間もなくレックスが自動車事故で半身不随になってしまいます。事故以来心を閉ざしてしまったレックスとの生活に疲れたサバンナを支えたのは、独身時代からずっと舞台で相手役をつとめていた俳優であり、レックスの親友でもあるマーク・ケンデルでした。

レックスとサバンナはマークのすすめで海辺の別荘に住むようになりますが、ある日、サバンナとマークが呼び寄せた客と共に海岸でバーベキューをしている間に、レックスは崖から車椅子ごと墜落して死んでしまいます。警察は将来をはかなんだ自殺として処理しましたが、マークはレックスが落ちた崖にかかっていた縄ばしごをひそかに処分し、サバンナにもはしごのことは口外しないようにと告げます。しかし後にマークは、レックスとサバンナの幼い息子ケニーがそのはしごのことを覚えているかもしれないと不安になるのです。

そして十七年後、レックスの事件の後サバンナと結婚していたマークはまた不安に襲われます。ケニーが脚本家としてデビューすることになったのですが、そのデビュー作がどうもハムレットを下敷きにしたものらしいからでした。ハムレットといえば、母と結婚するために父を殺したおじに復讐する王子の話。ケニーは何かを見たのだろうか、父の死に疑問を持っているのか、自分を疑っているのだろうか。いてもたっても

いられなくなったマークは、半ば強引にケニーの作品に出演することにします。マークは芝居が上演される小さな町におもむき、慣れない現代演劇の世界で苦労しながら、少しずつケニーと打ち解けていきます。十七年間互いに近寄ることのなかった二人でしたが、俳優と脚本家として、義理の父と息子として、言葉を交わし始めるのです。しかしそこにサバンナがやってきて事態は一変し……。

最初の章でレックスの死が語られますが、真相は結末まではっきり明かされません。マークが殺したのか、それともはしごを処分しただけなのか。そもそもレックスの死は自殺なのか、殺人なのか。ちなみにペーパーバック版の裏表紙には「……十七年後、ある人物が自殺する結果になる」と書いてあるので、読者は誰が自殺するだろうと思いつつ読むこととなります。

謎以外の部分では、演劇界の様子がじっくりと書き込まれていて読みごたえがあります。またサバンナという強烈な存在感を持った女性もの描写も見事です。

マガーは常人には考えられないようなエネルギーを持った女性を、ある意味容赦なく描きますが、このあたりは現代のミステリ作家エリザベス・ジョージを思わせるものがあります。もちろん時代が半世紀も前で、書かれている内容はおとなしめですが、描き出されている女性像は時代を超えて普遍的なのだと思います。この描写力がマガーを趣向だけでは終わらないミステリ作家にしたのでしょう。

第5作の『四人の女』の献辞を見るとマガーが四人姉妹だったことがわかります。また『七人のおば』の献辞は「六人の姉妹を持つ母と／七人の姉妹を持つ父に」です。つまりマガーには小説の中より多い、なんと13人ものおばがいたのです！『七人のおば』のサリーもびっくりの女系家族といえるでしょう。マガーがその作品に個性的な女性たちを数多く登場させ、その描写がいきいきしていたのは、身の回りにたくさんのおばがいたおかげかもしれませんね。

パット・マガーの作品リストを翻訳通信のサイトに掲載しました。URLは以下の通りです。

<http://homepage3.nifty.com/honyaku/tsushin/my/dt/pm.html>

小尾芙佐訳『アルジャーノンに花束を』

けえかほおこく 1

スト劳斯はかせわぼくが考えたことや思いだしたことやこれからぼくのまわりでおこたことわせんぶかいておきなさいといった。なぜだかわからないけれどもそれわ大せつなことでそれでぼくが使えるかどうかわかるのだそうです。

ちいさな子供が書いた作文ではありません。今回ご紹介する翻訳書、小尾芙佐訳『アルジャーノンに花束を』の冒頭です。大人になっても幼子ほどの知能しか持たない主人公チャーリーが、人体実験まがいの IQ 向上手術を受けるのを発端とする物語。この作品にはいわゆる地の文というものはなく、テキストはすべてチャーリーの書く「経過報告書」の形式をとっています。

この本を読みはじめて 15 分経ったか経たないかという頃でした。「あれ、この本ってノン・フィクションだったっけ」と思い、私は背表紙の説明書きと序文を確かめました。著者は序文にこう記しています。

『アルジャーノンに花束を』は、虚構の物語であるけれども、これは、実在の人物の実話にもとづいてかかれたものではないかという質問をしばしば受ける。(ダニエル・キイス著小尾芙佐訳『アルジャーノンに花束を』早川書房/ダニエル・キイス文庫 1 p6)

ひとが人間の領域を踏み越え、試験管のなかでヒトをつくる時代です。チャーリーの受けた IQ 向上のための手術が実際の出来事のように感じられるのも無理はありません。しかし本書のリアルさとは実現可能か否かを云々した次元の話ではなく、自分の身にふりかかったような感覚があるということなのです。

語弊を恐れながらもあえてざっくり言うならば、小尾訳『アルジャーノンに花束を』は文章の生みだす世界に破綻がないため、異常なほどのリアルさを持っています。芥川を拝借して言いかえるならば、「本当らしい小説とは単に事件の発展に偶然性の少ないばかりではない。おそらくは人生におけるよりも偶然性の少ない小説である」のです。

『アルジャーノンに花束を』は事件の発端こそ奇抜で

すが、発展はきわめて偶然性の少ない物語です。偶然性が殊更に少ない、要するに「本当っぽいなあ」と思えるのはこんなところです。

- ・チャーリーの IQ 向上に伴う周囲の態度の変化。好人物が悪人になる場合、またその逆の場合、どちらも絶対的な人格の変化ではなく、ひとりの人間が持つ善と悪の両要素がどう現れるかで善人に見えたり、悪人に見えたりする。
- ・幸せな場面もそうでない場面も、幸と不幸、一方の要素しか持たないのではなく、必ず両要素を併せ持っていること。幸、不幸の判断は当事者の考え方次第。
- ・チャーリーの知能指数と文体が正比例していること。視覚的、あるいは聴覚的な文体はやがて情緒的になり、分析的になったところで IQ はピークを迎える。その後、急カーブを描くように IQ と文体は元に戻っていく。

周囲の変化と幸、不幸の判断、このふたつの臨場感、は、巧妙に現実を写実した内容の面白さによります。一方、文体の変化が自然なのは、いくつかの文体を書き分けられる筆者の筆力に支えられています。内容と文体が二人三脚をしながら絶え間なく変化していく、そこにこの作品の面白さがあります。逆を言えば、もし内容の変化と文体の変化が寸分でも違っていれば物語は急に現実味を失い、色あせてしまうことでしょう。日本語版、小尾訳『アルジャーノンに花束を』は原書の持つリアルさを損なうことなく、日本の読者の感覚に合わせた文体で訳された名訳書です。

では文体の変化を味わいながら例を並べてみていくことにしましょう。

【 手術前の経過報告書】

Dr Strauss said I had something that was very good. He said I had a good motor-vation. I never even knowed I had that. I felt good when he said not everbody with an eye-Q of 68 had that thing like I had it. (原書ペーパーバック版 p9)

ストラウスはかせはぼくがともていいものをもっているといった。いいもーたーべーしょんをもっているといった。そんなものをもっているとわからなかった。あい Q が 68 の人間がみんなぼくがもっているようなものをもっているとわかざらないといわれたときわいい気分だった。(p30)

【 手術後まもなくの経過報告書】

I said that all my friends are smart people and their good. They like me and they never did anything that wasnt nice. Then she got something in her eye and she had to run out to the ladys room. (p37)

ぼくの友だちはみんな頭がいいしみんないい人ですよとぼくはいった。みんなぼくのが好きでいじわるなんかしたことないですよ。するとキニアン先生の目の中になにかたまってきて洗面所へ走っていかなければならなかった。(p76)

【 IQ の最高時の経過報告書】

They don't like to admit that they don't know. It's paradoxical that an ordinary man like Nemur presumes to devote himself to making other people geniuses. (p153)

彼らはわからないということをも認めたがらない。ニーマーのような凡庸な人間がおこがましくも人間を天才に仕立てることに熱中すると言うのは逆接めいている。(p251)

【 最後の経過報告書】

I dont no why Im dumb agen or what I did rong. Maybe its because I dint try hard enuf or just some body put the evel eye on me. But if I try and practis very hard maybe Ill get a littel smarter and nowhat all the words are. (p310)

どうしてまたばかになってしまったかぼくがなにかわりいことをしたかわからない。きっと僕がいっしょけんめやらなかったからかもしれない誰かがぼくにまじないをかけたからかもしれない。でももうちょとりこーになってことばもみなわかるよおになるだろうな。(p484)

時間の経過に合わせて報告書を見ていくと、チャーリーの文体が放物線を描くように変化しているのがわかります。 の拙いながらもほほ笑ましい原文は助詞

のぎこちなさで表現されています。チャーリーが初めて耳にする motivation、IQ といった言葉は、子供が耳で聞いたままの音を文字にしたような可愛らしい訳語があてられています。

の例では自分の判断したことを言葉で表現するのに成功したチャーリーの様子がうかがえます。文章からは誤記が消え、成長の度合いが的確に表現されているのがわかります。その一方で洞察力の足りなさは幼い語彙で表現されています。この時期のチャーリーをの文体は的確に表現しています。仮に前後に挙げた例の文体で訳してみてもうまくはいかないでしょう。では荷が重すぎ、では温もりが伝わりません。

の原文には学術的で驕慢なチャーリーの姿があります。思い上がった知識人の書きそうなシニカルな文章を、小尾氏は辛辣な文体で訳しています。教授批判のたった数行には、チャーリーの置かれている立場、知性のほど、斜に構えた姿勢など膨大な情報が詰まっています。文字にしていないことまで伝えるのは、小尾氏の採用した文体が内容にびたりと一致しているからではないでしょうか。

は退行の進んだチャーリーが書いた文章です。文体から判断するに IQ は と の間くらいなのでしょう。読んでいるとただ無性に切なくなる文体です。いじらしい熱意が幼い言葉で綴られているだけに、一層の哀愁が胸を締めつけます。

様々な文体を持つ 4 例には共通している点があります。それは原文に忠実に訳されていること。それでいて日本語として読んだ際、翻訳書にありがちなひきつれ感がないこと。柳瀬尚紀氏の『翻訳はいかにすべきか』(岩波新書)によると、翻訳の大家、二葉亭四迷は初期、カンマには句点を持って一字一句を損なわずに訳そうと骨折っていたそうです。ただしそれでは日本語の読み物として完成しえないことを悟り、文章の飛躍過多を恐れつつも、文体を日本語に引き寄せる方針をとるに到ったらしいのです。これほど原文に忠実に訳しながら日本語として破綻がなく、読者を魅了する翻訳書があるのをあの世で四迷が知ったらどう思うでしょう。多少の嫉妬を禁じえずも、後人の成果にさぞやご満悦なのではないでしょうか。

『英文解釈教室』(研究社出版、伊藤和夫著)

大学受験生対象にロングセラーをつづけるこの本は「東大志望者が全員買うが、最後までだれもたどりつけない本」として有名だ。さもありません、大学受験生程度の学力でこの本の内容についてゆけるとは思えない。とにかく難しいのだ。まず取り上げてある文章の多くは高級かつ抽象的な英文で、時として破格に慣れさせようとするのか悪文もある。かつ文法的解説が微に入り細にわたっており、逐一の理解にエネルギーを要する。それでも英語力の涵養になるから懸命についてゆこうという気にさせるのが、この本の実力である。読んで目から鱗がおちることもしばしば。

例えば第5文型の説明にこうある

「OがCであると、Sが考える[知る]。

OがCである状態を、Sが生じさせる。

という2つの意味が基本であり、」(第2章)

早速原則を適当な英文に当てはめて、

I thought him honest. himが honest であるとIが thought する、のか

He shouted himself hoarse. himselfが hoarse である状態を He が [shouted して]生じさせるのだな、なるほどと納得した。

まただれもがよく悩む修飾関係についてはこういう。

「英語は語句の並行的な対応関係を重んずる言語であるから、この際は、

まず(H+H)M という均衡のとれた形で考え、((柴田注)H:被修飾語 M:修飾語)

この解釈で通らぬ場合にかぎって H+ (H+M)の解釈をとるべきである」(第14章)

うん、plants and animals useful なら「有用な植物と動物」とまずとり、おかしければ「植物と有用な動物」とすればよいのか。なんでこんな簡単なことを学校で教えてくれなかったのか、と怒りと感動がないまぜになったのを覚えている。

とはいえ難しさの三つ目の要因は、この著書の欠点と言えるものであって、それは「訳が悪い」ことである。

伊藤は「大学入試以後に、一般教養として、翻訳の訓練が行なわれることはない。いきおい、学生は、大学入試の訳出法が唯一のものであり、その種の訳文が

十分に通用する日本語だと思い込んでしまう。彼らが大学入試後にその方法で専門書を翻訳することが、大量の意味不明の翻訳書を我々の社会に横行させている。いや義務教育の段階から、『ひっくり返る』という形で不自然な日本語を学生に強要してきたことが、翻訳調の日本語を生み、日本語を破壊してきたのである」(『予備校の英語』研究社)と嘆き、本書でも例題の全訳のところどころに、訳出の工夫を述べているくらいだから、読むに耐える訳文については、十分に認識していたものと思われる。だが、悲しいかなその伊藤の日本語訳がところどころ不満足なのだ。とくにまずいのは語感が鈍いこと。そのため多義語の語義の選択が甘く、日本語のコロケーションがおかしく、ニュアンスや力点がずれることがある。この三つが、ただでさえ難しい原文と日本語訳とのつき合わせを困難にしている。ここでは全15章のうち第1章を取り上げてその訳文を検討してみる。

(番号、下線部は問題箇所。評価基準は次に従う)

誤訳：明らかな解釈・語法の誤り。英文和訳の試験でも×になるもの

悪訳：原文と日本文で理解の差を生じさせるもの

誤差：正しくはないが翻訳の誤差として許されるもの

修正訳：日本語訳で原文の意味が正しく伝わっているかどうかを問題にするため、伊藤訳を最小限訂正したもの

第1章

1.1.1

The freshness of a bright May morning in this pleasant suburb of Paris had its effect on the little traveler.

伊藤訳：この 楽しいパリ郊外の5月の明るい朝のさわやかさが、小がらな旅人 に影響した。

楽しい[悪訳]：遊園地か景勝地があってそこ(郊外)が「たのしい」場所みたいにとれてしまう。ここは enjoyable and making you feel happy の意味「気分をよくしてくれる」

小柄な[誤差]：「小柄」なら small とか short だろう。little は「かわいい、若い、小さい」の意味を併せ持つ美称ととるのが順当(以前アメリカのテレビ・ドラマ *Shogun* で国際スターになりかけた島田楊

子が、国際女子マラソンの優勝者、ゴーマン美智子に扮した映画 Little Champion の little がこの感じ)。だが日本語ではこの三つの意味を併せ持つ単語が見当たらない(か弱い、という意味も加えれば「いたいけ」になろうが)ので、満足はゆかないが意味が偏らない訳語を選ぶ「ちいさな」

影響した[悪訳]: 例えば believe in him での him は「存在としての彼」「彼の内面」のうち、当然内面のほうで「彼のいうことを信じる」の意味だが、「彼を信じる」としてもよいのは「彼=彼の内面」と自然に理解されるから。effect は「～に(on)結果を引き起こす影響・効果」だが「さわやかさが、...影響した」では、身体(存在)に影響したものととられてしまう。これはコロケーション(言葉と言葉の結びつき具合)の問題。ここでの effect は心(内面)に及ぼすに決まっているから、言葉を補って(「の気持ちに影響した」)訳文の読み手を正しい理解へ導いてやらねばならない。意識でも説明訳でもない、原文はそこまで書いてあるのだということ、得心してほしい。

freshness 「すがすがしさ」bright 「(日光などが)明るい」。Its は主語全体を指す。

修正訳: この気分のよいパリ郊外の 5 月の明るい朝のさわやかさが、そのちいさな旅人の気持ちに影響を与えた。

1.1.4

The element radium, discovered by the Curies, is probably the most remarkable substance in the world.

伊藤訳: キュリー夫妻が発見したラジウムという元素は、おそらく世界で最も注目すべき物質 であろう。

「おそらく...であろう」[誤差]: probably は頻度でいえば「十中八九」。可能性はきわめて高い。

修正訳: キュリー夫妻が発見したラジウムという元素は、世界で最も注目すべき物質であろう。(「おそらく」を除いた)

1.1.5

The greatest American hobby today is photography. Every other person encountered at vacation resort or seen strolling in a city park carries a camera.

伊藤訳: 現在、アメリカ人の最大の趣味は写真である。

休日の行楽地で出会う人や町の公園 を散歩しているのが見られる人のうち、2 人に 1 人はカメラを持っている。

「休日の行楽地」[悪訳]: resort はラテン語由来で、「しげしげと通う」の意味から、(1)盛り場 (2)行楽地。ここは名詞ながら形容詞的にはたらく vacation がつき、グローバル英和辞典にも「休日の行楽地」とあるが、この訳語自体がおかしい。対する平日の行楽地などといったものがあるようではないか。日本では行楽はおおよそ休日にするものときまっている(!? トホ)のだから「リゾート地」「行楽地」でよいだろう。ちなみに保養地は a health resort。

「散歩しているのが見られる人」[悪訳]: encounterd と seen はともに受身形で person に掛かっている。日本語訳もきちんとした日本語で能動か受動かに統一するのがよい。「...で見かける散歩を楽しんでいる人」。photography は「写真撮影」

修正訳: 現在、アメリカ人の最大の趣味は写真である。行楽地で出会う人や町の公園で見かける散歩を楽しんでいる人のうち、2 人に 1 人はカメラを持っている。

1・1 例題(1)

A sensitive and skillful handling of the language in everyday life, in writing letters, in conversing, marking political speeches, drafting public notices, is the basis of an interest in literature. Literature is the result of the same skill and sensitivity dealing with a profounder insight into the life of man.

伊藤訳: 日常生活において、つまり 手紙を書いたり、会話や政治演説をしたり、公式の通知を起草したりするときに、気をつけてたくみに言葉を使うことが、文学への関心の基礎となる。文学は、同様な技巧と感受性が人間の生活に対するもっと深い洞察を取り扱うところから生まれるのである。

「手紙を書いたり...起草したりするときに、」[誤差]: in が三つ並んでいるが、1 番目は 2、3 番目に対し上位概念(生活のなかに、書いたり話したりがある)なので、「すなわち」とつづけるのはよいが、3 番目の in のあと 3 つがひとかたまりで 2 番目の in と並列しているのに注意したい。つまり , / , (3-1, 3-2, 3-3) の形の並列。ここでのように並列の逐一が重要なものでない場合、原文と同じ並列の格をそろえるより読みやすさ優先にするのは翻訳では常道だが、英文和訳の練習としては文法優先の訳をつけるべきだろう。この の箇所のようにザクッと訳す所と次のようにいわゆる直訳の箇所が何の基準もなく入り混じっているのが、この書に限らず英文読解本に見られる不満のひとつである。sensitive は「感覚が鋭い」こと。

「同様な技巧と...生まれるのである」[悪訳]：原文を忠実になぞれば、(文学は)「そういった気の使い方とたくみさが人間生活をもっと深く見通す状態を按配する成果なのである」

insight into ~ 「~を見抜く(こと)」insight は可算名詞化され具体的なものに転化「見抜く/こと・物・状態・力など」deal with ~ 「~を扱う」「~を処理する」「按配する」「論ずる」「云々する」「行う」

だが、このままではどうも日本語としてわかりにくい。そこではじめて英文和訳での意識の意義が認められるのだ。

修正訳：日常生活で、手紙を書くときでも、会話や政治演説や公式通知の起草をするときでも、気をつけてたくみに言葉を使うことが、文学への関心の基礎となる。文学は、こうした技巧と感受性を以って人間の生活をより深く洞察しようとするところから生まれるのである。

1.2.2

Most of us when we have seen houses which were picturesquely situated, and wore a look of unusual beauty and comfort have felt a desire to know who were the people that lived in them.

伊藤訳：絵のように美しい所にあり、まれに見るほど美しく楽しそうな様子をしている家を見て、そこに住むのがだれか知りたいと思った経験を、たいいていの人は持っている。

「絵のように美しい所にあり」[誤訳]：situated 形容詞化した他動詞「(~に)位置して」。例：Her town is situated at the foot of Mt. Fuji.

houses which were picturesquely situated をあえてわかりやすく一文にすると、houses were situated in a picturesque way(家々は絵のように美しいあり方で位置していた)。つまりここは、「家のある場所が美しい」のではなく「家の佇まいが美しい」のである。

「美しく楽しそうな」[悪訳]：beauty は前と同じ言葉がつづくのを避けるため「きれい」とする。まさか家自体が楽しんでいるわけではあるまい、comfort は beauty と並列する訳語を選ぶ「快適」。wear は「~を帯びている」

修正訳：絵のように美しい佇まいをみせ、まれに見るほどきれいで心地よさそうな様子をしている家を見て、そこに住むのがだれか知りたいと思った経験を、たいいていの人は持っている。

1.2.3

Those who live nobly, even if in their day they live obscurely, need not fear that they have lived in vain.

伊藤訳：高潔な生活を送っている人々は、たとえ無名のまま人生を送っても、人生が空しく終わることを恐れる必要はない。

「人生が空しく終わることを恐れる」[悪訳] (誤訳に近い)：obscurely は「名もなく」。主文が現在形だから、真理に順ずる事実を示している。目的語が現在完了形なので、「これまでそうしてきた」ことをあらわす。fear that ~ は「~してしまうのではないかと(恐れつつ)思う」。「人生の終わり方が空しい」ではなく、「空しいやり方で人生を送ってきた」と懸念するには及ばない、といっている。

修正訳：高潔な生活を送っている人々は、たとえ無名のまま人生を送っても、空しい人生を送ってしまったのではないかと思う必要はない。

1.3 例題

In choosing an occupation, you determine many things that involve your happiness and satisfaction in life. The home you make, the community in which you will live, the standard of living that you will maintain, the recreations you pursue, and the environment in which your children will grow up will largely depend upon your choice of vocation.

伊藤訳：職業を選ぶ ときには、生涯の幸福と満足を含む多くのこと が決定される。人の作る家庭、その住む地域社会、維持する生活水準、求める娯楽、子供の成長する環境は、大部分がどんな職業を選ぶかで決まってくる。

「ときには、...決定される」[誤差]：《in ~ing, 主文》の場合、in 以下の副詞節が原因、主文が結果をあらわす場合が多い。ここの因果を訳にだしたほうがいいところ。

「を含む」[悪訳]：訳文では「幸福と満足は、多くのことに含まれる」の「幸福と満足など多くのこと」なのかがあいまい。実はこの「含む」は「必然的に伴う」の意味なのだから、それをくだいて「...に係る」「...にかかわる」ぐらいの訳をつけるのが、英文和訳であっても望ましいだろう。

修正訳：職業を選ぶことで、生涯の幸福と満足にかかわる多くのことを決めることになる。人の作る家庭、その住む地域社会、維持する生活水準、求める娯楽、

子供の成長する環境は、大部分がどんな職業を選ぶかで決まってくる。

*ここで伊藤は「訳出の工夫」として次のような注意を读者に与えている。

上文を訳すとき、you、your に対していちいち、「あなた(方)」と訳さないと気がすまない人はいないだろうか。(例「あなたはあなたの幸福と満足を含む」)。この you は目の前の特定の人をさすのではなく、人間一般についてあてはまることを述べるために用いられるものであって、上の訳文のように訳出をさけられればいちばんよいし、かりに「みなさん」のような訳語を用いるとしても、1 回訳したら 2、3 行の間は同じ訳語のくり返しはさけてほしい。英語の you は 1 行の中に 2、3 回出ても別にくどくはないが、「あなた あなた あなた」式の日本語は流行歌だけにとどめてもらいたい。(翻訳に関心をもってくれるのはありがたいが、もう少し自分の訳文を練ってから言うのでないと、説得性がないかな—私のつぶやき)

1・4 例題(2)

Whether either the material or the intellectual changes in the past half century produced comparable changes in the American character is difficult to determine. The forces that create a national character are as obscure as those that create an individual character, but that both are formed early and change relatively little is almost certain.

伊藤訳：過去半世紀の 物質的または精神的变化のいづれかが、アメリカの国民性にそれと比較しうる変化を生み出したかどうかを決定することはむずかしい。 国民性を作り上げる力は、個人の性格を作り上げる力と同じくらい 目立たぬものである。しかし、どちらの性格も早く形成され、比較的むずかしが変化しないことはほとんど 確実と言ってよい。

「物質的または...どうかを決定する」[誤訳]：「いづれかが 生み出したかどうか」では「どちらかが生み出した」「どちらも 生み出していない」の答えを予想させてしまう。Whether と either ~ or がからみあってわかりにくいところだが、何ら説明はない。英文読解本には、本当に知りたいところが解説されていないことがよくあるが、ここも著者の伊藤がよくわからないので説明を端折ってしまったのかと勘ぐりたくなる。

代わって説明しよう。

まず Whether で始まる主節を it で置き換え読んでみるとわかりやすい。

It is difficult to determine whether either the material or the intellectual changes ~

either A or B : A か B かどちらかの選択 まるごとでと示す

whether : or not が隠れている。つまり であるのかないのかの選択

であれば、A もしくは B (がある)

でない(A もしくは B であるということではない)

というのは、二つ考えられる

- ・ A でも B でもない
- ・ A でも B でもある

以上より次の四つの可能性が述べられているのがわかる。

- (1)物質的变化が国民性の変化に影響を与えた
- (2)精神的变化が国民性の変化に影響を与えた
- (3)どちらも国民性の変化に影響を与えていない
- (4)どちらも国民性の変化に影響を与えた

これが語法的な分析だが、文の流れから見れば「どちらも、少なくともどちらかは...与えた」感じであり、力点は、「与えたか」どうかよりも「決定するのがむずかしい」のほうだ。

それで(このような解説をきちんとした上で)修正訳のような訳文を提示するのがよいだろう。comparable は「と比較に値する、に匹敵する」、ここでは「the material changes または the intellectual changes に見合った」

英語を学びなおしたい人にとって絶好の再入門書

翻訳力錬成テキストブック

柴田メソッドによる英語読解

柴田耕太郎 著

定価 10,290 円 (本体 9,800 円) A5 版・680p

課題の例文は定評ある 100 編の名文を選定
実践的な翻訳技術養成講座

日外アソシエーツ

〒143-8550 東京都大田区大森北 1-23-8
TEL.03-3763-5241 FAX.03-3764-0845

「目立たぬ」[悪訳]：影がうすいわけではなく、わかりにくいのである。obscure は「不明瞭な、あいまいな」

「确实」[誤差]：「确实」と「確か」は使われる場面がちがう。これは国語の問題。日本語の使い方が甘くては、いくら英語の意味を云々しても説得性がない。

修正訳：過去半世紀の物質的变化または精神的变化のいずれにしる、その変化に応じてアメリカの国民性を変えたかどうかを決定することはむずかしい。国民性を作り上げる力は、個人の性格を作り上げる力と同じくらいわかりにくいものである。しかし、どちらの性格も早く形成され、比較的わずかしき変化しないことはほとんど確かと言ってよい。

いかがですか。文例自体が難しく、かつ訳文に頭を悩ます題材なのがよくわかったでしょう。だからこそ、訳語の選定には慎重の上に慎重を重ねてほしかったところ。

「This is the house in which he lives.

『これはその中に彼が住んでいるところの家です』に類するような悪文が、翻訳だけでなく評論文などにも見られることの最大の責任は英語教師にあるのではなからうか」(『予備校の英語』)とまで言い切っている伊藤。この本は 20 年ぶりに大改訂している(死の直前まで校正していたのは感動的：1997.01.21.死去。1997.02.05.改訂版発行)のだから、時間がなかったとの言い訳はできまい。自分が「責任ある英語教師」の一人に含まれるのを、伊藤先生は気づいていたのだろうか。

研究社出版へ

これは最高の英語文法学習書です。ただ皮肉なことですが伊藤先生のよい翻訳への思いをこの本に反映させるには、訳文を修正する必要があります。できれば私に校閲させていただきたい。

アイディ 『英文教室』 受講生募集のお知らせ

柴田耕太郎

英文を精確に読み解く語学力と論理力があれば、翻訳は自ずと出来るものと私は確信しています。

学校教育の欠陥からか、この二つを備えた翻訳志望者はせいぜい 20 人に 1 人(アルク翻訳大賞の審査経験から)。私が主宰するこの教室では徹底した精読訓練を通じ、「一点の曇りなく読み解く」技術の習得を目指します。

大学生をふくむ翻訳家志望者、翻訳書編集者、語学教員、その他卓抜な英文読解力をつけたい社会人の入門を期待します。

9 月より定数集まり次第、開講。精読エッセイ 100 題、出版翻訳 25 題、読み解きポイント 50 講など各種講座あり。

株式会社アイディ

柴田耕太郎 主宰 『英文教室』

事務担当 前川 / 岡里

TEL : 03-3357-1189

FAX : 03-3357-4489

Email : educa@id-corp.co.jp

〒162-0054 新宿区河田町 7-6 ID河田町ビル